

近紫外線除去フィルムでハモグリバエ類の発生を抑える

[研究のねらい]

ナモグリバエ、マメハモグリバエ、トマトハモグリバエは野菜や花きの重要害虫です。いずれも薬剤感受性が低いため、農薬による防除は困難です。ハウス栽培での総合的防除の一環として、これらハモグリバエ類に対する近紫外線除去フィルム利用による被害抑制効果を明らかにします。

[研究の成果]

- ①エンドウ栽培ハウスの外張り資材として近紫外線除去フィルム（以下、UVA）を利用すると、ナモグリバエの発生および被害を抑制できます（図1）。
- ②ガーベラやミニトマト栽培ハウスの外張り資材としてUVAを利用すると、マメハモグリバエの発生および被害を抑制できます（図2、3）。
- ③ミニトマト栽培ハウスの外張り資材としてUVAを利用すると、トマトハモグリバエの発生が少なくなります（図4）。

[成果の活用面・留意点]

- ①UVAは、390nm以下の波長の光が透過しない製品を利用します。
- ②UVAによる被害抑制効果は成虫の侵入忌避によるもので、換気のための側窓の開口率によって効果は異なります。
- ③UVAはナスや青色の花き類では着色不良となるので利用できません。また、ミツバチを利用する栽培にも利用できません。
- ④エンドウ、ガーベラ、ミニトマトについてはUVA被覆による生育・品質等に及ぼす影響は認められませんが、作物によっては軟弱徒長になる場合があるので栽培管理上の工夫が必要です。
- ⑤UVAは灰色かび病やアブラムシ類、コナジラミ類、アザミウマ類の発生を少なくする効果もあります。

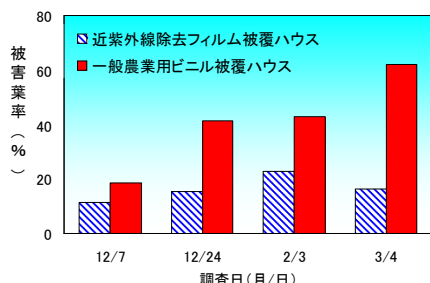


図1 エンドウのナモグリバエの被害抑制効果(1992～1993年、御坊市)

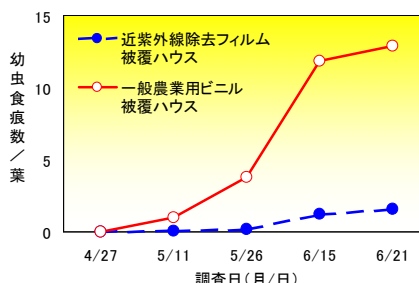


図2 ガーベラのマメハモグリバエの被害抑制効果(1994年、御坊市)

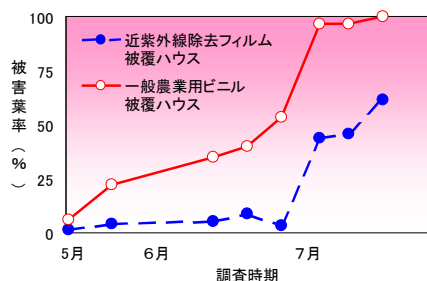


図3 ミニトマトのマメハモグリバエの被害抑制効果(1995年、貴志川町)

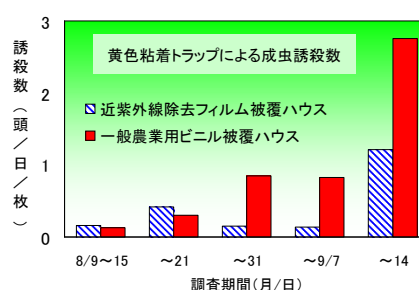


図4 トマトハモグリバエに対する発生抑制効果(2000年、日高町、ミニトマト栽培)

実施年度：平成4～12年

担当者：井口雅裕、東勝千代、矢野貞彦、森下正彦、宮本純子